春曙文庫蔵「源氏忍草」箚記

A Note of "Genji Shinobugusa" collected in the Shunsho Library

中西健治

はじめに

数多い源氏物語梗概書の中で、「わかりよい俗語に訳しながらも、野鄙に陥らず、且遺漏もないやうに書きあげた、最も親切な書である」[1]とも、「懇切かつ平明な入門書として類書を抜く」[2]とも評される『源氏忍草』（以下『忍草』と略称）は大正の末年に活字化され普及している。加えて、『湖月抄』を著わした北村季吟の嫡男として父の仕事を支え続けた湖春の生涯唯一の業績でもあれば、いま少し考究するに価値ある作品であろうと思わざるを得ない。しかしながら、従来より本書自体を対象とした研究は少ない。

本学図書館所蔵の春曙文庫の目録作成にあたり、田中重太郎氏旧蔵の『忍草』四冊の書誌記録の際、識語中に「甘千叟芳室」の名を見出し、かつて同様の識語をもつ本について報告[3]したことから、再度該本（以下「春曙本」）と略称）を中心に『忍草』についての検討を書き留めておく必要を感じた。本稿は一昨年刊行された『春曙文庫目録（和装本編）』の補記として纏めたものでもある。

一　芳室の識語

本稿の契機となった「甘千叟芳室」署名の識語は、以前、兵庫県立小野高等学校所蔵の写本四冊（以下「小野本」）と略称）のうち、第四冊の末尾に見出した。論述の都合上、両者の識語を対校して記す。小野本に春曙本を対校させた。なお、・は小野本に対応する春曙本の文字の無いことを示す。

忍ふ草四・冊・は北村湖春法橋の述作となん尾上氏なにかしの尼

公は年比むつましかりしかりしか源氏物かたりの諺解してみせ給へとしるて所望有しをいなひかたくて書つゝけ送られたることになんおもへらくさきにその家君季吟法橋の書附集られし湖月抄をみるにも此書を熟見し巻々の大綱を会得ありてかつ諸抄をわたるに其綱の小目まてあきらかに其小目まて あらはれやすきかことしはしめ桐壷よりをはり夢のうきはしまてを読通してやまと仮名あいさ〳〵俗語をもとりましへ其道すしをつまひらかに正し給ふるは闇夜にともし火盲者の杖をえたるにひとしといふへし予はからすも此一書手に入しを悦ひ衆とゝもにす俊成卿の哥よまん人は源氏しらぬは無下にいやしとのたまひしことのはしをおもへは誹諧にをきてもいさゝか補になるへしとこゝに跋を加ふのみ

甘千叟芳室　誌

右の対校文から、まず小野本の方が春曙本の倍ほどの分量のあることがわかる。また、小野本の方には、例えば、「忍ふ草四冊」と改まった書き方をしていること、「源氏物かたりの諺解してみせ給へと」と尾上某の依頼の意図と作品の内容に言及していること、「おもへらく」「会得ありて」「あらはれやすきがごとし」などの漢語調があることなどが注目される。後半部「はしめ桐壷より……」以下の「忍草」の叙述方法とそれのもたらす効用に触れるあたり、さらに「闇夜にともし火盲者の杖」といった巧みな比喩、俊成卿の「哥よまん人は……」の有名な言を引き合いに出していることなどから、小野本の方が本来の芳室稿ではなかったかと思われ、春曙本はその縮約文であると考えられる。これは芳室が椎本才磨門の重鎮、「悦山和尚に参禅し、正徳年中に韓国人と唱和した」[4]ほどの学識の持ち主であったこととも矛盾しない。

二　『忍草』の写本

ところで、『忍草』の写本は『国書総目録』等によって写本、版本四十数点を知ることができるものの、うち半数以上を占める版本は天保五年版一種で、写本の中にも臼杵図書館蔵本[5]や東京大学附属図書館蔵本[6]、九州大学文学部蔵本のように版本を写したことが明らかな本もある。『忍草』写本についての研究は、中哲裕氏によって鶴岡市立図書館蔵本が翻刻紹介[7]された際に、版本との異同についても細大漏らさず対校、注記されているものが最も克明で、それを活用されつつ版本を底本とし他の諸伝本をも参照してなされた西沢正二氏の『早わかり源氏物語忍草』が有益なもので、これには読解のための語釈等に加え、『忍草』本文についての注記や源氏物語青表紙本系本文との異同についても触れるところがある。西沢氏は右の書物の「解題」で諸本について次のように述べておられる。

『源氏物語忍草』の伝本は、『国書総目録』及びその補足調

査によれば、現段階ではおよそ次のごとくである。

○写本→国会・金沢大・九大・慶大・東大・広大・都立中央・天理・桃園・鶴岡市立・無窮・内藤家・福井家。

○版本→天保五年版、各所に約三十本。

現在までのところ、写本数種について調査したが、異本と呼ぶべきような伝本はなく、唯一の版本である天保五年版と写本との差異はごく小さいものであるとみられる。（二四二頁）

中氏の写本一本と版本との対校を概観してもそのことはわかるし、さらに他の写本数本を加えても総じて大きな異同のないことが確認される。[8] いかにも西沢氏の説かれるとおりである。たゞ、「ごく小さいもの」の中には写本本文を導入することの方が好ましく思われる箇所もあるにはある。西沢氏が著書の中で特に注記されていない若干の例を出す。上段は『早わかり源氏物語忍草』、下段は春曙本本文、傍線は稿者による。

紫の上と碁打ち、篇つぎをして遊び給ふ。ある夜、紫の上と新枕し給ひて、源氏、惟光を召して、

（葵・三二頁）

紫のうへと碁うち編次をして遊ひ玉ふある夜紫の上と新枕し玉ふその次の夜は亥子餅にて餅飯を奉るを見玉ひて源惟光を召て

紫の上との新枕をかわして後、三日夜の餅を紫の上に供することは物語に、

その夜さり、亥の子餅参らせたり。かかる御思ひのほどなれば、ことごとしきさまにはあらで、こなたばかりに（中略）君、南の方に出でたまひて、惟光を召して、（㊀一六五頁）[9]

とあり、重要な場面ではある。版本でも読解に無理はないものの、写本本文により的確な理解が得られよう。

入道のひとり留らむを心苦し う思ふ。入道は、かかること を年月願ひければ、

（松風・五七頁）

入道独とゝまらんを心くるしうおもふ入道はかゝる御迎ひにて京へ上せん事を年月願ひけれは

明石の君上京に際しての父入道の思いは、物語に「親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど」（㊀一三九二頁）とあって、写本の方がより具体的表現にもなり得る。同様な例をもう一例。

御心まうけせし人々、口惜しうおぼす。男といふものは、思はぬ人を思ふ顔に、

（総角・一六二頁）

心まうけせし人〻くちおしうおもへりあね君はましてあだ成御心ゆへとくちおしうおぼすおとといふものはおもはぬ人を思ひかほに

紅葉狩と称して宇治を訪れた匂宮は、結局中の君にも会えず、それがために大君は深く嘆く。物語に次のようにある。

心まうけしつる人々も、いと口惜しと思へり。姫宮は、まして、「なほ音に聞く月草の色なる御心なりけり。ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、そら言をこそいとよくすなれ。思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるものと、

（五―二八八頁）

版本では誤解を招くところ、写本によってこそ大君の心に触れる豊かな理解ができるものである。もちろん版本の本文を採るべき例もある。若菜下巻で源氏が女楽を催す準備をさせる条、

紫の上を女三の宮の御方に参らせたてまつり給ひ、(a)御方々も集ひ給ひて、御琴ども参りわたす。紫の上に和琴、桐壺の女御に箏のこと、女三の宮に琴、明石の御方に琵琶、(b)今日の拍子合はせには童べを召さむとて、玉鬘の腹の三郎君、笙の笛、

（一一三頁）

むらさきのうへを女三の宮の御方へまいらせ奉り給ふむらさきのうへはわこんきりつほの女御はこと女三はきんのことあかしの御かたはひは(c)うときおとこどもはよふへきにあらすとて玉かつらのわか君しやうのふえ

物語では叙述配列が異なり次のようにある。

（源氏ガ紫の上ヲ）寝殿に渡したてまつりたまふ。（中略）廂の中の御障子を放ちて、こなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて、中の間は院のおはしますべき御座よそひたり。(b)今日の拍子合はせには童べを召さむとて、右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄君笙の笛、左大将の御太郎横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。(a)内には、御褥ども並べて、御琴どもまゐりわたす。秘したまふ御琴ども、うるはしき紺地の袋どもに入れたる取り出でて、明石の御方に琵琶、紫の上に和琴、女御の君に箏の御琴、宮には、かくことごとしき琴はまだえ弾きたまはずや、と危くて、例の手馴らしたまへるをぞ調べて奉りたまふ。

（四―一七八・一七九頁）

『忍草』は女楽を念頭に置いたための縮約と思しく、女性を先に、男性を後にしているが、写本には(c)のような語句が混入している。(b)の方が分りやすく、(c)はどうみても理解しにくい。招いた夕霧に調絃を依頼する源氏の言葉に、「ここにまたうとき人の入るべきやうもなきを」（四―一八〇頁）とあるのをここに置いたのかも知れない。

写本、版本の本文検討の素材として語句の点にも触れておく。写本には「御はらへ」（榊）、「御はか」（須磨）、「もろこし」（同）、

「はなかめ」（胡蝶）、「御ありき」（椎本）とあるところ、版本では各々、「御祓」（七〇頁）[10]、「御陵」（八三頁）、「唐土」（九〇頁）、「花瓶」（一七七頁）、「御歩行」（三五三頁）とあり、写本の方が物語の用語に即していることが確認できるが、一方、写本で「こころみのかく」（紅葉賀）とあるところ、版本に「試楽」（四六頁）とあり、こちらの方が物語と一致している。

これらのことから、ごく当然のことではあるが、写本、版本双方を詳細に検討しつつ本文を吟味していく必要があるように思われる。もっとも、「忍草」も一作品として独立しているものであることから、必ずしも原作との対照作業が有効に働くとは言えず、むしろ、写本筆者と版本の本文決定者との意識の違いという問題として処置してもよい面もあろう。

三　春曙本の本文

写本本文に及んだついでに春曙本本文の問題に若干触れておく。

四冊ある写本のうち、桐壺巻から若菜上巻の五丁目までを一人、後半若菜上巻から夢浮橋巻、跋文までを別のもう一人が書き写し、ほぼ等量の本文を合わせて一作としていることがわかる。そのうち前半はやや漢字表記を多く採り込んでいるのに対し、後半はそれを抑えた書き方である。他の写本と比較するならば、前半に通うものとして小野本、中島図書館蔵[11]本、慶応義塾大学図書館蔵本、後半に通うものには例えば天理図書館蔵本、国会図書館蔵本、鶴岡市立図書館本、金沢大学図書館蔵本などがあげられる。ともかくも前半と後半とでは表記のし方が異なっているのであって、それは相異なる祖本に依ったためか、書写の際の改変によるのか、にわかには分からないものの、二人の筆写者が別々の作業として取り組んでいた結果であろうと思われる。

春曙本の書写態度は他の写本に比べ良好であるとは言い難く、例えば「空蝉」を巻名として扱ってはいないような書きぶりで、「うつせみはゝ木ゝのいでのならひや」と一行書きにしたり、夕顔巻の末尾（版本の二行分）を写し忘れて次の若紫巻に移っていたり、また、目移りによる脱文や重複文もある。春曙本はいささか慎重さに欠ける態度によるのではないかとも思えるのである。

しかし、他の写本、版本に見えない本文もあるにはある。桐壺巻、「玄宗の嘆きに引きくらべ、いとど御涙はれがたき折しも」（八頁）の「はれがたき」を「にかきくれ給ふ」、「命婦、母君にもらひし手道具など」（八頁）の「母君にもらひし」を「はゝ君より玉はりし」、「方士が亡き人のありか尋ねて」（八頁）の「なき人」を「貴妃の魂」とする例。また、夕霧巻頭の「実なる人」（一二九頁）、少し後の「実なる御心」（一三〇頁）を春曙本では「しつかなる人」「しつかなる御心」とあり、夕霧を「実なる人（誠実ナ人間）」と見つつも「静かなる人」と把えようとする意識が働いていると見

受けられる。

四　河村正周の識語

春曙本で最も注目すべきものは二つの識語である。本節では本書の素姓を記す識語について述べる。まずその全文を掲げる。（傍線は稿者）

此しのふ草一部四冊往年予か師五流斎桑老父布門先生おなしき嫡婆束二男女媒等父子の手跡にて染毫せられし善本同門三木北箕にひめ置しをせちに借用して一字をたかへす写し侍るなかに少〳〵愚弟紋苣か書るもましれりことし明和八年の夏懇望によりて平井氏に授与して後の記念ともしてんと思ふ事になむ　　河村正周　書

右の識語が事実であるならば、春曙本、若菜上巻（六丁目）からこの識語に至るまでは同一の筆跡と見えることから、筆写者は河村正周なる人物である。いまのところ河村正周なる人物については不詳という他ないが、この識語に記された他の六名について判明するところだけは示しておき、後考を俟ちたい。

○　五流斎桑老父布門

『日本古典文学大辞典』「布門」の項（櫻井武次郎氏執筆）から摘記する。

俳人。桑原氏また井上氏。別号に五流斎・四月坊・桑老父。来山門。来山没後の享保期より活躍。『桑老父』（寛延三年（一七五〇））は全四冊の大部なもので、布門のみでなく当代の俳論書として貴重。

五流斎の号は長男婆束が二世を継いだが早世し、二男女媒が三世を襲い、四世は女媒の息化石（生没年未詳）が継いだ。

元禄四（一六九一）年――宝暦六（一七五六）年

○　婆束

布門の長男。享保十三（一七二八）年――明和二（一七六五）年十一月六日

著に『阿波土産』（宝暦八年刊）。『いなの篠笹』（宝暦四年刊）、『桑老父三回忌追善集』（宝暦八年刊）など編む。宝暦年間に活躍。

○　女媒

布門の二男。享保十八（一七三三）年――寛政元（一七八九）年二月二十二日

著に『椿亀鑒』。『福海集』（安永五年刊）、『布門追善集』（安永九年刊）、『冬牡丹』（天明五年刊）、『貫珠篇』（寛政元年刊）などを編む。宝暦から天明にかけて活躍。

○　三木北箕

中野荘次氏編『和歌俳諧人名辞書』に、

「北箕　　（未詳）　　◎古今下　」（二九〇頁）

とある。「古今」とあるのは、『古今短冊集』（俳句帖）のことで、宝暦元（一七五〇）年刊。大夢庵毛越自序、蕪村跋、二八四葉を収め、乾は貞徳～桂室、坤は芭蕉～珠光を収めている。[12] また、矢島玄亮編『徳川時代出版物集覧』によると、延享元（一七四四）年に『弐萬梅』、寛政元（一七八九）年に『大和土産』三十六冊が北箕の手によって編集され、大坂の藤倉清蔵が刊行していることが知れる。とくに『弐萬梅』は布門の撰になることから、布門と北箕の結びつきは深いものであったろう。彼は布門門にあって延享元年以前から活躍していた俳人であろう。

○ 紋芭

漆山天童編『名号引き近世人名辞典』に、

「紋芭　　画・俳

延享四年　　蛙嚢鈔に画く。」　　（三六六頁）

とある。いかにも『国書総目録』「蛙嚢鈔」の項に次ようにある。

「二巻二冊　類俳諧　著文イ舎編、米倉某画　成延享四　版国会」

なお、同一本か不明であるが同じく『国書総目録』に「絵俳諧（仮題）　二巻二冊　類俳諧　著文イ舎著、米倉某画　成延享四序　版京大」とある。これらの記事と『名号引き近世人名辞典』の記すところとが何ら矛盾しないことから、紋芭はすなわち米倉某であるとみてよい。

○ 平井氏

不詳。

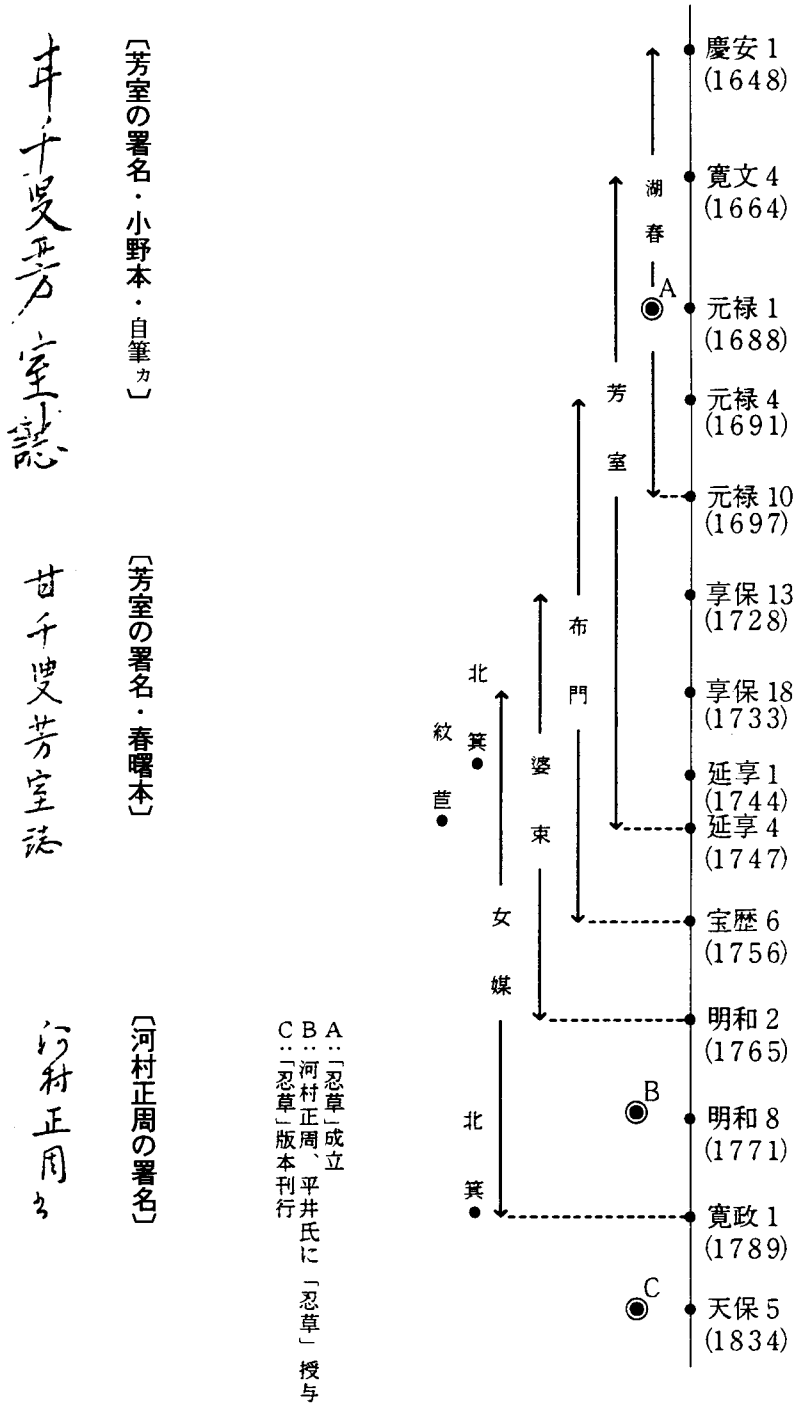
付 河村正周

これも不詳。布門の門人で北箕、紋芭、平井氏と交際があった人物であることが識語からわかる。

以上のように、春曙本識語にみられる人物について概観した。いささか隔靴掻痒の感を免れ難いものの、各人が俳諧を通しての交流があり、その中で河村正周から平井氏に授与されたのが本書ではあったのである。

そもそも本書の祖本は五流斎布門父子の書写に成るものというからには、少なくとも布門没以前、すなわち宝暦六年以前に書写作業が始められていなければならず、かつ、布門父子が共同で事に当ったと解するならば二男女媒が父や兄に交わって書写をする能力を有するようになる時期以降という上限の年代は設定できよう。そして同門の三木北箕がこれを秘蔵し、そのことを知った河村正周が弟子である紋芭に手伝わせて書写し、明和八年（一七七一）、平井氏に与えたのであった。

春曙本は少なくとも河村正周と紋芭とが書写に関わっていたとみられ、先に述べた書写二人という見解に照らせば、前半が紋芭、後半が河村正周ということになる。ただし、「少〳〵」とか、「ま



A：「忍草」成立
B：河村正周、平井氏に「忍草」授与
C：「忍草」版本刊行

〔芳室の署名・小野本・自筆カ〕

〔芳室の署名・春曙本〕

〔河村正周の署名〕

じれり」という文言の含みと、紋芭が全面的に前半部を書写したとみることとの間には若干の乖離は否めず、「愚弟」という謙辞の延長上で理解すべきなのか、あるいは別の人物がいたかとも想像されるけれども、これ以上は憶測になってしまう。

おわりに

『源氏忍草』は北村湖春の手を離れて以後、約百五十年間は写本で伝えられ、天保五（一八三四）年にやっと版本として刊行されたものの、それっきりでもあった。まことに数奇な運命をたどった作品といえよう。その足跡の一斑を本書は明らかにしてくれ、また幾つかの点をも考証する糸口を与えてくれたのである。これらを源氏物語享受史のうえにどう位置付けていくかは今後の課題であろう。

注

（1）関根正直氏「源氏物語忍草　解題」（『袖珍名著文庫　源氏物語忍草　附紫家七論』所収）

（2）『日本古典文学大辞典』「源氏物語忍草」の項（今西佑一郎氏執筆）

（3）拙稿「小野高校蔵『源氏物語忍草』覚え書」（「兵庫国漢」第三十三号）

（4）『日本古典文学大辞典』「芳室」の項（櫻井武次郎氏執筆）

（5）臼杵図書館蔵本は天保五年版本を忠実に写したもので、各冊の末尾に「天保九年戊春於江戸写之　浅井政恒（花押）」などとあり、版本刊行からさほど下らない時期に写していることがわかる。

（6）東大本は巻一と巻五を欠く。

（7）中哲裕氏「鶴岡市立図書館蔵『しのふ草』（上）（中）（下）」（鶴岡工業高等専門学校研究紀要第十、十一、十二号）

（8）『国書総目録』等で知ることのできる写本のすべてを見たわけではない。後日の課題である。見ることが不可能に近いものもあり、その中に大きな異同を有する本がないとも限らぬ。『天理図書館叢書第二十五輯　天理図書館稀書目録　和漢書之部　第三』に「紫のふくさ」（三七七頁）とある本（「しのふくさ」の表記誤りであろう）は、第一冊目（「赤」）には『湖月抄』にある「系図」を載せ、各巻の初めには『湖月抄』の「年立」を抽出して並べ、それに『忍草』の本文を続けている。また、金沢大学図書館蔵本には冒頭に為時についての漢文記事を載せている。これらのことを含め、諸本の問題については機を改めて論じたい。

（9）『日本古典文学全集　源氏物語』による。以下、源氏物語は本書を使用する。

（10）西沢正二・豊島秀範両氏編『源氏物語忍草上（下）』（勉誠社文庫）による。

（11）群馬県太田市、中島図書館の所蔵本。四冊目末尾に「七十一歳休翁　峯跡写」とある。ただし、この本は版本に近い本文をもつ。

（12）中野荘次氏著『和歌俳諧人名辞書』所収「収載短冊影譜解題」（三頁）による。

（付記）貴重な資料をお譲り下さった中哲裕氏をはじめ、御協力いただいた各図書館当局に厚く御礼申しあげます。